

中学校国語科における「注釈」を用いた漢文学習の試み

－『論語』「孟武伯孝問」(為政第二)を教材として－

井上 泰

中学校国語科教科書の多くには、『論語』が採録されている。稿者は、漢文テキストの学習を拡充させていくことをねらいとし、中学校国語科授業において、『論語』「孟武伯孝問」(為政第二)と本テキストに対する3つの「注釈」を用いた学習を行った。本稿は、その実践報告である。学習の実践から、「注釈」を用いた学習の効果について述べたい。

1. はじめに

本稿は、2016年度中学校2学年122名に対して、3学期に行った国語科授業の実践を報告するものである。

中学校国語科教科書には、『論語』を採録するものが多い。本校が採用している学校図書『中学校 国語2』にも、『論語』4編、「子曰吾十有五而志于学」(為政)、「子曰学而不思則罔」(為政)、「子曰由誨女知之乎」(為政)、「子貢問曰有一言」(衛霊公)が採録されている。

こうした教材の扱いについて、今年度、稿者は、昨年度の国語科授業の中で漢文を扱っていないことを踏まえて(本校採用教科書『中学校 国語1』は故事成語を採録)、まずは白文や訓読文などの意味から説明し、訓点の意味を教えたり、書き下し文をつくる練習をさせたりして、漢文という〈ことば〉の基礎的な知識を教えた。

そして、次に『論語』を単に訓読のトレーニング教材とするのではなく、学習者と『論語』とを出会わせる(学習者が『論語』から意味を見出し、そこで思索すること)ために、それぞれのテキストが開く問題領域を、「子曰吾十有五而志于学」=〈人生〉、「子曰学而不思則罔」=〈学知〉、「子曰由誨女知之乎」=〈知〉、「子貢問曰有一言」=〈他者〉と授業者が設定して、学習者に考えさせていった。授業後、学習者からは、「論語はおもしろかった」、「奥が深かった」といった意見が聞かれた。

2016年8月に出された「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(報告)」(文部科学省HP、平成28年8月26日)には、古典学習について、「伝統文化に関する学習については(略)古典を自分の生活や生き方に生かす観点(略)から整理を行い、改善を図ることが求められる。」(ii)教育内容の改善・充実「イ教育内容の見直し」とある。「審議のまとめ」にあるように、稿者も、学習者の「生活や生き方」と古典テキストとの接点を考え授業を行うことで、学習者にとって古典テキストや古典学習が意味のあるものになると考えている。上述した『論語』学習もその実践例の一つになるだろう。

ただ、こうした漢文学習を、さらに拡充させていくことはできないだろうか。そう考えて、本稿で報告する実践、『論語』「孟武伯孝問」(為政第二)と、本テキストに対する3種類の「注釈」を用いる学習を行った。

本テキストの、「孟武伯」の孝とは何かという問いに対しての孔子の言葉「父母唯其疾之憂」には、以下に示すように3種類の注釈がある。

①古注…漢から唐にかけての注釈

(テキスト)『論語集解』、『論語義疏』、『論語正義』

(内容)父母には病だけを心配させ、他の事では心配させない。

②新注…南宋・朱熹(朱子)の注釈

(テキスト)『論語集注』

(内容)父母は子どもの病を心配する(したがって子は健康でいなければならない)。

③近世の注…日本江戸、清の注釈

(テキスト)『論語古義』、『論語微』、『論語正義』

(内容)子どもは父母の病を心配する。

①と②を比べると、主語が①は子、②は父母となり対照的である。また、「疾」(病)についての考え方も反対で、①は病は仕方がない、②は病こそを気をつけなければならないという。③は、主語は子で①と同じだが、子が父母の病を心配するという行為は、①の父母には病だけを心配させ、他事は心配させないという心構えと大きく異なる。

以上のように解釈の異なる注釈を用いることで、〈訓読〉という解釈行為を通して創造される漢文という〈ことば〉のおもしろさや難しさ、また、漢文テキストを解釈するということについて広く考えていくことができるのではないかと考え、実践を行った。

なお、注釈については、新釈漢文大系『論語』(45頁)や辞書『全訳 漢辞海』にも記述があるが、今回は主に、平成27年度に教員免許状講習として開講された「漢文教材の現在と教材研究」(講師 佐藤大志 大学院教育学研究科教授、於広島大学、2015. 8. 21)での講義をもとにして教材分析を行った。

2. 授業計画

授業は次のように計画を行った。

■時間数 全2. 5時間

□第1時

(導入)〈孝〉, 特に〈親孝行〉についてのイメージについて問う。

(展開1)

『論語』では, 〈孝〉はどんな風に考えられているかを読むことを伝え, 次のようにプリントで本文提示。

*孔子の返答には, あえて訓点や口語訳をつけていない。

<p>【口語訳】 孟武伯は(孔子に)孝とは何かを尋ねた。 孔子は答えた, 「父母唯其疾之憂。」と。</p>	<p>【書き下し文】 孟武伯孝を問ふ。子曰はく, 「父母唯其疾之憂。」</p>	<p>【訓読文】 孟武伯問_レ孝ヲ。子曰_{ハク}, 「父母唯其疾之憂。」</p>	<p>【白文】 孟武伯問_ク。子曰, 「父母唯其疾之憂。」</p> <p>* 孟武伯…人名。魯(国名)の大夫(役人)。 * 疾…病氣。* 憂…心配する。</p>
---	---	---	--

(展開2)

「孟武伯」の問いに対して孔子が何と答えたのか。漢字の意味や並びで想像し, 考える。*訓読文を考えるのではなく, どのような内容かを考える。

(展開3)

想像した孔子の考えを発表する。複数あることを確認。(まとめ)本時のふりかえり。

□第2時

(導入)前回の振り返り。

(展開1)

まだ発表されていない読み方について発表, または紹介。

(展開2)

それぞれの読み方は, 実は長い時代の中で作られた注釈でもあるということを伝え, 考え出された順番を予想し, 答え合わせをする。

*次の文章は, 伝えるときに配布したプリントの文言である。

学習してきたように, 「父母唯其疾之憂。」には三つの読み方があります。みなさんは, 現代においてこの三つの読み方を同時に考えたり, 学んだりしましたが, 実は, この三つの読み方は, 一度に考えられたものではなく, 時代を経て考え出されたものです。一番古いものは中国で二世紀頃に, 一番新しいものは日本で十七世紀頃(江戸時代)に考え出されました。この三つの読み方は, 時代を経て『論語』を読み継いできた古人たちが, その時代ごとに『論語』のこの文はこういう意味だ」と考えて, 編み出した読み方でもあるのです。では, この三つの読み方, 一番古い読み方はどれでしょうか。また, 二番目に古いもの, そして一番新しいものはどれでしょうか。考えてみよう。

(展開3)本学習を踏まえて考えたことを書く。

□第3時

学習者の気づきをプリントにし配布。まとめと振り返りを行う。

3. 授業の実際

ここでは, どのように学習者が反応し, どのように授業が展開していったのか主な所を記述する。

□第1時

(導入)

〈孝〉, 特に〈親孝行〉についてのイメージについて問うた。実際に今, 〈親孝行〉をしているという学習者はいなかった。イメージを尋ねると, 「大学に行く前に感謝を伝える」, 「社会人になって, 金銭的に援助する」, 「働いて旅行に連れて行く」というのが主なものだった。学習者の中では, 〈親孝行〉はお金を稼ぎだして, 金銭的に援助したり, 一緒に娯楽を楽しんだりというイメージを持っていることが分かった。

(展開2)

1番多く出された読み方は, ③近世の注(子どもは父母の病を心配する。)だった。主語を補わなければならなかったが, 主語を補って読んだのかと問うと反応はいまひとつだった。意識的に主語を補って読んだというよりも, 導入の問いによって〈親孝行〉という前提が作られたため, 無意識のうちに主語を子にして読んでいるようだった。

続いて少数ではあるが, ②新注(父母は子どもの病を心配する。したがって子は健康でいなければならない)

の読み方で読んだ学習者がいた。授業者が、どうして父母が子を心配することが〈孝〉になるのか、父母が子を心配することが〈孝〉なのかと問うと、答えられない学習者もいた。こうした学習者は、主語を父母として素直に本文を読んでいたようだった。しかし、父母が子の病を心配するということは、子は健康でいなければならない、その心構えが〈孝〉になるのだと考えられた学習者もいた。そうした意見は、③近世の注で読んだ学習者にも発見を与えたようだった。

①古注についてであるが、①古注で読んだ学習者はおらず、全く見当もつかないというようだった。

そこで、第2時では、①古注については次回とし、②新注と③近世の注とを板書し、それぞれの違いを次のようにまとめた。

『論語』 父母唯其疾之憂	
① 子は父母の病を心配する (訓読文) 父母 _ニ 唯 _ク 其 _ノ 疾 _ヲ 之 _レ 憂 _フ (書き下し文) 父母には唯だ其の疾を之れ憂ふ ☆意味 (子は)父母の病を心配する ※主語を補う	(倒置＝強調) 助詞の働き
② 父母は子の病を心配する (訓読文) 父母 _ハ 唯 _ク 其 _ノ 疾 _ヲ 之 _レ 憂 _フ (書き下し文) 父母には唯だ其の疾をこそ之れ憂ふ ☆意味 (子は)父母の病を心配する (つまり、病気になるてはならない)	主語 目的語 述語

*板書について、①と②の意味のところは、学習者が発表したものをまとめて書いた。訓読文や書き下し文は、授業者が提示した。意味のところは、まとめとして学習者と確認しながら書いた。

なお、訓読文及び書き下し文を提示する際に、注意したことがある。それは送り仮名の違いを確認するとともに、主語が何であるかということであった。主語が変わると、本テキストでは、〈孝〉の内容が大きく変わる。主語をどう解釈するかが内容を定める決め手となる。また、助詞「之」の意味についても触れた。「之」があることで、「其疾」と「憂」が倒置関係になり、内容が強調される。学習者には、漢文の基本構造(主語―述語―目的語)と口語文の基本構造(主語―目的語―述語)との

違いを思い出させ、本文が漢文の基本的な構造ではなく、口語文の構造に近いことに気づかせ、「之」の役割について理解させていった。その際、学習者には、「私は野球をする」を漢文で書いてみよと指示を出した。分からない学習者もいたが、多くの学習者は「私行野球」と書くことができた。

以上のようにして、訓読の違いが、文の内容の違いになることを確認していった。

□第2時 (展開1)

前回確認した読み方以外で、他の読み方はないかを尋ねた。3クラスとも出なかったので、①古注について、右のように紹介した。

その際に、学習者の発想、知識として無かった使役形を教えた。

(展開2)

注釈を出来た時代順に並べるという作業を行った。当然のことだが、他の情報がなくただ勘に任せで行うしかないものだったので、正答、誤答ということではなく、答え合わせを

した。全て合っていたものは少なく、次に引用するように①古注(学習者には③として提示)が一番古いことに驚いた学習者が多くいた。複雑な読み方を古い時代の人がしていたことに驚いたようだ。「まとめ」には次のような記述があった。

「論語」には色々な種類の注釈があつて深みがあるものだなと思えた。「父母をして唯だ其の疾をのみ之れ憂えしむ」の読み方が一番古いと知って驚いた。三つの大きな注釈のうち、一番考えさせられる意味が深いものが最も古いということは二世紀の中国人にはそこまでの考えにたどりつけた、すごく賢明な人がたくさんいたということだと思ふ。短い文の中に、注釈がたくさんあつて複雑なもの、論語の面白みの一つなのでは、と思つた。

以上の学習を踏まえて、「まとめ」を書かせた。

③ 父母には病だけを心配させる (訓読文) 父母 _ヲ 唯 _ク 其 _ノ 疾 _ヲ 之 _レ 憂 _フ (書き下し文) 父母をして唯だ其の疾をのみ之れ憂えしむ ☆意味 父母には病だけを心配させる (病気は仕方がないがそれ以外は心配させてはだめ)
※○○をして△△(せ)しむ 使役形 意味：○○に△△させる

4. 学習者が考えたこと—「まとめ」より

学習者には、「『論語』とその注釈(意味を解説したものを)読んできて、考えたことや気づいたことを書こう。」という課題を出して「まとめ」を書かせた。ここでは、その「まとめ」から注釈を読む学習の効果について考えていく。

1 〈孝〉に対する見方・考え方について振り返る

まずは、〈孝〉に対する自身の見方・考え方について振り返る契機となったことについて述べたい。次に引用するように、自分たちの見方・考え方とは異なる多くの考え方に出会うことで、学習者は自分たちの見方・考え方を振り返ったようだ。

A 一つの文から、たくさんの解釈ができるのだなと思いました。私は〈孝〉について、一番新しい意味「子は父母の病気を心配する」というようなイメージをずっと持っていたが、今回この論語を勉強して確かにいろいろな考え方ができるのだなと納得しました。子から親に何かをすることだけが〈孝〉というわけではないのだと分かりました。

B はじめに自分で「孝」の意味を考えてみた時、誰かのためを思って役立つことだと思っていて、答えは決まっているものだと思っていた。実際読んでいくと、読み方によって様々な意味でとることができ、答えは一つではないんだと気付いた。

複数の注釈を読むことで、学習者が自分の見方・考え方について振り返ることができる、まずこのことが「注釈」を用いる一つの効果である。

なお、学習者が抱いている〈孝〉のイメージは、現代の〈消費〉という言説の中でつくられていったものであろう。次に引用するように学習者の中には、自分の考え方について批判的な見方をしているものもあった。

C この文の意味を1500年間何人もの人が考えていたのはすごいです。〈孝〉は目に見えるものをあげることだけではないんだと思いました。大切なのは「心」なんだと思いました。

D 僕は「孝」は子が親に何かを与えることだと考えていました。なので右の2が一番しっくりとききました。でも何かを与えることが全てではないことを知りました。与えるという発想はまだまだ子供の考え方なのだと思いました。

このような意見はあったものの、今回の学習では、こ

れ以上自分たちの〈孝〉観について考え深めていかなかった。しかし、次に引用する学習者の気づきには、近世日本の考え方が現代の自分達の考え方の元になっていることを指摘する記述がある。

やはり日本で解釈されてある新しいものは親孝行の意味に似ているなどと思った。親孝行の意味はこれがもとになっているかなと思った。

例えば、こうした気づきをもとにして、補足資料を用いたり、学年は上がるだろうが調べ学習をしたりして、学習者に具体的に現代の〈孝〉の考え方がどのように創られていったのかや自分たちの見方・考え方に何か問題はないかなどを考えさせていくことができるだろう。

2 解釈(注釈)と時代の関係について考える

次に、解釈の違いから、注釈の背景にある時代の文化性や当時の人々の考え方の違いについて考えた学習者が多くいたことについて述べる。引用するように解釈の背景にあるものを、学習者は様々に想像している。

A 「父母唯其疾之憂。」という一つの文章から三つの異なる考え方が存在していることに驚いた。このように一つの文章から生み出された複数の考え方にはその時代の出来事や生きていた人々の思い、民族・文化による違いが映し出されているのだと思う。

B 私は一番が最も新しいと思い、予想していましたが、一番古い読まれ方だと知り驚きました。その時代の医療について深く知っているわけでもないのですが、少なくとも現代より病で亡くなる人はとても多かったと思います。だから「病にかからないようによく注意する」ことが孝なのかと思ったら「他事はしっかりと、病は仕方ない」だったので、昔は実用的な親孝行がなされていたのかなと思いました。

C 一つ一つの解釈は当時の文化や考え方を表していると思った。1「父母をして」の解釈では、唯一病を仕方のないものとしてとらえていた。そのころは病にかかることが多かったので、そのように解釈されたのではないかと思う。三種類の読み方はすべて教えとして意味をなして、親子関係について色んな考え方ができたのでよかった。

時代の異なる注釈を読むことで、解釈(注釈)とその背景にある文化や社会、風習、またその中で生きた人々の考え方との関係について考えることができる。

また、そうした注釈を通してその当時の人たちの「気性」や「時代のこと」を知ること自体を、興味深く感じ

ている学習者もいた。

D 孝とは何か、考えるだけで三つも読み方があり、漢文は面白いと思った。昔からある解釈と違う読み方をするとするのは、発想の視点をかえる事でもしかしたら、もう一つの読み方があるかもしれないと考えたと同時に様々な視点でみれてすごいなと思った。他の論語の注釈も時代によって書かれているのであれば、その時、そう考えた人達の気性もわかるかもしれないと思うと、漢文を読むのがとても楽しくなった。

E 時代が変わると論語の読み方が変わっているのもっと他の文も書かれた時代ごとに深く読んでいけば、その時代のことなどがくわしく学べるのではないか、と思った。

複数の注釈を用いることで、時代の特徴というのを感じられるのであろう。複数の注釈を用いることで、「時代」ということが焦点化されてくる。これを契機として、解釈と時代、社会、文化等の関係について考えさせていくことができるのではないだろうか。こうした学習は(ことば)や言語文化への理解を深めることになるだろう。

3 解釈の可能性について知る

ここまで、各注釈のものの見方・考え方と出会い自身の見方・考え方を振り返ったり、各注釈の背景にあるものについて考え、また興味を覚えた学習者の意見を取りあげてきた。ここでは、複数の解釈を読むことそれ自体に興味を感じている学習者の意見を取りあげたい。

A 「論語」は同じ文でも読む人によってちがう解釈ができて、面白いと思いました。

B 今まで古文は難しいと思っていたけど、同じ文を様々な読み方ができるのはおもしろいと思いました。

C 論語のイメージはとてめかた苦しく、難しいものであると思っていましたが、意外と同じ文でも意味や考え方が異なっているものもあっておもしろいなと思いました。自分の考え方が中国の二世紀頃の人とかぶっていることにも驚きをかんじ、またおもしろいなとも思いました。

D 一つの言葉で三通りの考え方が出来る「論語」というのは奥が深い書物なのかなと思いました。わたしははじめ漢文は少し難しそうイメージがあったけど、今回の授業を通して少しおもしろいなと思うことが出来ました。

『論語』に限らず、漢文や古文はこのように読むのと教えてしまいやすい。それは学習者に古典的知識がな

いから仕方がないことなのだが、一方で解釈をも同時に与えてしまう。しかし、上記の傍線のように、そのように教えることでかた苦しさをを感じる学習者もいる。もちろん古典的知識は大切であるが、それと同時に解釈を教えこむというのも問題があるのだろう。「まとめ」には次のような記述もあった。

一つの文に、色んな読み方や意味があつてとてもおもしろいと思った。それぞれの意味について考えていって比較するのもおもしろいと思う。もっと漢文を勉強していったら、このようにまた別の読み方や意味が発見できるんじゃないかと思った。

本学習者は「読み方や意味」の「発見」について述べている。漢文を主体的に読むということにおいては、「読み方や意味」を「発見」していく態度を養うことは大事なことであろう。教室で様々な解釈を教えることは時に難しい場合があるが、このようにして複数の解釈を示し、解釈の可能性を感じさせていくことで、無意識のうちに解釈を教えこむ学習よりは、もちろん見出された意味次第だが、主体的に漢文を読もうという態度を養うことができるのではないだろうか。

4 訓読について考える

上記で述べたように、複数の解釈を読んでいくことは、別の読み方や意味を発見しようとする態度を育成する上で効果的であろう。しかし、同時に知識に基づいた訓読も出来るようになってほしい。「まとめ」には訓読の仕方について次のような意見もあった。

○主語について

A 時代を追うごとに、論語の中の主語が変わっていると思う。古い二つの読み方は父母が主語だけど、一番新しい物は子が主語になっている。

B 日本語の文ではいつ読んでも読み方はほとんど変わらないのに漢文は主語が変わってしまう程読み方が変わってしまっていた。そこが漢文の難しさでありおもしろさであるのかなと思った。

○送り仮名について

C 論語は、送りがなを付けなければいろいろな意味に捉えることができて、とても面白かった。同時に送りがなを間違えたら内容が大きく変わるので、気を付けなければならないと思った。

このように複数の訓読を示すことで、逆に訓読の際の重要な点について気づくことができている。また、訓読が解釈行為であることに気づいた学習者もいる。

どの文にも書き下し文があるので、読むことができるが、白文を書き下し文にする際には数多くの意味が変わるとわかった。書き下し文にする際に、誰がどういった心情で見るかによって、内容は変わっていくのだと思った。漢文のとらえ方の変化によって時代の変化が読みとれたりするのかと思った。

漢文の意味は、訓読によって変わり、その訓読は読み手の解釈によって変わる。こうした意識で訓読文を読むことで、訓読者(解釈者・書き手)の考え方や意図を考えながら読むことができるだろう。漢文の学習は、単に語句や句法を覚えるということに終始してしまいがちだが、このようにして訓読文を読むことで、知識を用いながら、訓読者の考えや意図を読むことができるようになるのではないだろうか。漢文学習において〈訓読〉への理解を深めることは大事なことであろう。

5 孔子そのものへと向かう

最後に、学習者の興味関心が『論語』や孔子に向っていったことについて述べたい。注釈を読むことを通して、孔子はどのように考えたのだろうかという問いが学習者の中で立ち上がったようだ。

- A 論語ほど有名な書物でも読み方が確立されていないものもあることを知って驚いた。三つの読み方が考え出された時代になんか間があるので、時代ごとに儒教観は微妙に変化しているのではないかと思った。でも僕自身は時代に応じて解釈が変わったものを「孔子が伝えたかったこと」と認めるのは少し抵抗がある。
- B 孔子は本当はどのように考えているんだろうと思いました。
- C 一つの記述からたくさんの読み方がとれるというのは非常に面白いと思いました。孔子は当時どういった意図でその言葉を述べたのかとても気になります。

周知の通り『論語』は長い年月をかけて成ったものであり、『論語』そのもので〈孝〉がどのように考えられているのかは焦点化しにくい。しかし、これをきっかけにして『論語』全体のものの方・考え方を考えたり、『論語』を読み進めたりしていくことができるだろう。

5. おわりに

学習者には、次のように注釈を読む中で、内容がよく分かっていったというものもいた。

ぼくは最初、論語はむずかしいものだと思っていたが、注釈をしながら読んできたらよく内容がわかって楽しいし、注釈の仕方もだんだん分かってきた。

以上見てきたように、注釈を読む学習にはいろいろな効果や可能性がある。改めてまとめると次のようになる。

- 1 複数の自分とは異なる考え方と出会うことで、自分の見方・考え方を振り返ることができる。
- 2 注釈を通して、解釈と時代との関係について考えることができる。また、発展的な学習をすることによって、自分の考え方について相対化して考えていくことができる。
- 3 複数の解釈に出会うことで、解釈は一つではなく、複数ある可能性に気づくことができる。このことは、漢文を主体的に読もうとする態度を育むことにもつながる。
- 4 主語や送り仮名など訓読する際に重要な点について気づくことができる。さらに訓読の仕方から訓読者の考え方や意図について考えながら読む態度を養うこともできる。
- 5 注釈されたテキスト自体の見方・考え方を焦点化できる。テキストを読み進めていくことができる。

以上のようにまとめることができる。「注釈」を学習に用いることで、〈訓読〉という解釈行為を通して創られる漢文という〈ことば〉について理解を深め、また漢文を解釈するということについて広く考えることができる。さらに、こうした学習は古人が漢文テキストを読み、意味を見出していったという古人の営みや古典世界のありようを理解する契機にもなるだろう。また、古文テキスト学習と重ねると、より厚みのある学習にもなる。

さて、今回は、〈孝〉について考える学習を組んだが、儒教観念がまだ存在している現在において、〈孝〉について考えることは、儒教観を強固にしたり、再生産したりしてしまう可能性があり、注意が必要である。今回の学習では、授業者としては、儒教文化圏においては、〈孝〉ということばで親子関係について考えてきた、では学習者は〈孝〉ということばも含めて、どのようなことばで、どのように〈親子〉関係を考えているだろうかと考えて行ってきた。学習の「まとめ」には、〈親子〉関係について考えられる図書を教えてと書いて書かせた。重松清、西加奈子など挙げる学習者がいた。発展的な学習として、他分野のテキストを読むことを通して、〈孝〉という言葉も含めて、〈親子〉関係について考えて深めていくことができるだろう。

以上、いろいろと課題は残るが、中学校国語科における「注釈」を用いた学習の試みとして報告した。今後さまざまな学習を考えていきたい。